

スウェーデン医療福祉の源泉

福本 一 朗

1 ローマは一日にして成らず

スウェーデンは「豊かな国」であるために世界最高の高福祉国となっていると信じている日本人が多いが、それは必ずしも真実ではない。わずか数十年前のスウェーデン人は飢餓におわれて当時の国民の4分の1が米国に移住した貧しい国民だった。面積も日本よりわずかに大きい40万km²であり、しかも国土の大半は日照時間も短く植物の成育に適さない極寒の地にある。地下資源も鉄鉱石を唯一の例外として他にみるべきものもない。そのためもあり現在でもGNPは世界第2位の日本にはるかにおよばない。そのような厳しい自然にもかかわらずスウェーデン国民は、教育・医療・老後・年金のどれに関しても個人的な愛いの全くない安定した福祉社会を享受している。経済的には世界を制覇している小国日本に課された次の命題は、スウェーデンのように幾多の実験の積み重ねを経て成功に至った小国を模範として未来の福祉社会を構築して行くことにあるといえるだろう。そしてどんな素晴らしいシステムにも隠された永い歴史があるように、それは決して一朝一夕に出来上がったものではない。またその歴史を知ることなく、出来上がった制度のみを模倣することはおうおうにして無益であるばかりではなく時には極めて危険であることを我々は既にな

らんども経験済みである。「和魂洋才」の旗印の元に富国強兵に勉め、最後には嘗々と蓄えた富のすべてを失った敗戦につながった明治時代の轍を2度と踏んではならない。

2 福祉社会以前のスウェーデン

13世紀のスウェーデンの法律によると貧乏で生活できない人々は血縁者が世話をする義務があり子供を扶養しない親は罰せられたという。世話をしてくれる肉親のいない貧乏人・身障者・病人は村々を巡り歩き裕福な農民達に食事と一夜の宿を乞うた。教会や修道院も貧乏人や病人の面倒を見た。16世紀のグスタフ・ヴァーサ王の時代になると乞食は禁止され、国立の病院(sjukhus)や自治体の救貧小屋(fattigstugor)が設置され、働けない病人・身障者・老人・孤児達の面倒を見るのが定められた。救貧小屋では男部屋と女・子供部屋が設けられ、維持費用は常に最低に押さえられた。しかしそれでも自治体は十分な救貧小屋を作るだけの予算がなかったので、苦肉の策として「乞食許可証(tiggarpass)」を発行した。17世紀になると乞食は自分の教区に留まらねばならないという法律ができ貧乏者の移動を禁じた。1806年にイエテボリ市では50歳以上で文無しの人・身障者・子だくさんの失業者の市内への移住を禁じた。乞食は社会秩序を乱すと考えた政府は1847年の

法改正で乞食を再び禁止した。また同時に「人はみな働く義務がある」という法律を作り、失業者を再就職するまで刑務所に入れることができるようになった。一方政府は、1842年に既に国を横断する大イェータ運河掘削と全国の刑務所建設事業による雇用機会を作り出し、乞食と失業者対策を開始していた。この様な社会福祉以前のスウェーデンにおいて、国民の一人として政府に頼らずにその独自の思想と実行力をもって福祉社会の建設に貢献した人々がいた。

3 二人の巨人

スウェーデン東印度会社が、カテガット海峡に臨む自由都市イェテポリ市に設立されたのは、英・蘭に遅れること130年以上の1731年のことであった。それ以来前後5つの東印度会社が1813年に解散するまでに132隻の船を広東とインドに送り、2千8百万個の陶磁器を始めとして茶・香料・絹織物・真珠・バラの木など東洋の香り高い奢侈品をヨーロッパにもたらした。スウェーデンが世界に誇る植物学者カール・フォン・リンネは、「永遠の価値を有する銀や有用な鉄を、すぐに壊れる東洋の土の固まり（陶器）や枯れ草（茶）となぜ交換しなければならないのか理解に苦しむ。」と批判しながらも、自分の弟子達を東印度会社の船を利用して東洋に送り込んでアジアの植物を研究させ、自分自身も蚕の飼育法を含めて2冊の中国の書物を欧州に紹介している。90%以上が更に欧州各地に転売された茶を見てもわかるように、スウェーデン東印度会社は、スウェーデンには富を、欧州の人々には東洋趣味の満足をもたらしたが、2人の傑出した指導者を出すことにより、現在のスウェーデンの医療福祉にも貢献していること

は日本には余り知られていない。その2人の東印度会社理事の名を、ニコラス・サールグレン(Niklas Sahlgren 1701-1776)とウィリアム・シャルメルス(William Chalmers 1748-1811)という。彼等の生涯と考え方は以下に述べるように驚く程良く似通っている。

4 サールグレンスカ病院

サールグレンは、1701年3月18日にイェテポリの富裕な地裁判事ニルス・ペーション・サールグレンと母サラ・ヘルベグとの間に生まれる。父は早く亡くなり、母の手ひとつで育てられ、16歳の時にオランダに留学して商学を学び、6年間アムステルダムの事務所に勤める。次の6年間は英仏独に留学する。28歳の時には生まれ故郷に砂糖工場を始める。後に同僚ヨナス・アルストレムと西印度会社を起こすが失敗し、32歳の時には設立2年目のスウェーデン東印度会社の理事となり、1768年まで35年間その職に留まる。その間、4百20万リクスドルに及ぶ巨万の富を貯え、晩年には貧しい人々を救うため、幾多の寄付をイェテポリ市に行なう。例えば近郊の農村アーリングソースに、「農業教育施設を併設した孤児院」を5万リクスドルで作る。また遺言状によって15万リクスドルをイェテポリ市に寄付し、彼の死後6年の1782年には24床の「救貧病院」が建設される。スウェーデンではウプサラ大学病院の前身の小規模な教育病院がそれまでであったのみで、市民のための病院はこのサールグレンスカ病院が初めてと言える。200年の歴史を持つこの病院は市民に親しまれ、1942年までに66件の一般市民から献金が行なわれている。商人、未亡人、役人、植木職人、仕立て屋の丁稚など寄贈者の階層は雑多で、寄付

金額も100リクスドルから10万リクスドルまでいろいろである。サールグレンスカ病院は後に、イエテボリ市およびボーフス県の基幹病院にしてイエテボリ大学医学部の臨床教育中央病院に発展して行く。1974年に700床の東分院が分離するまでは2000床という単独では北欧最大規模を誇ってきたとともに、年間300件の腎臓移植が行なわれるスウェーデン最大の腎移植センターとしても知られる様になり、また1984年スウェーデン初の心臓移植を行なって以来4件の移植が行なわれており、1988年初頭からはスウェーデン唯一の心臓移植センターとなる。ちなみにセンプ教授のスカンダル（職員との対立）も禍して今回、心臓移植センターになる事を逸したカロリンスカ病院は、ノーベル医学生理学賞の選出委員会があることで有名であるが、その市民病院としての歴史は意外と新しく成立は1940年で、その前身は17世紀のカール王時代の軍医養成学校であり今日にいたるまで衛戍病院としての性格を保持し続けている。これに対して設立当初から、貧しい一般市民を対象とし、200年も以前に市民の力のみで設立され、市民自らの手で運営されてきたサールグレンスカ病院はスウェーデン医療福祉制度の嚆矢をなしていると言えよう。

サールグレンの私生活においては44歳の時にアンナ・マルガレータ・ヴィトマクと結婚したが翌年彼女が他界した後、46歳でカタリナ・クリスチーナ・グレブと再婚し2女をもうける。この娘達は2人ともヨナス・アルストレムの息子達と結婚し、遺産のほとんどを継承する。サールグレンは、72歳の時に科学アカデミー会員となった以外、政治には一切近づかなかった。「最低の貴族となるよりは、最良の市民でありたい。」と願い、拜金主義者達には冷酷に振舞

う半面、貧しい人々を助けることを常に考えていたと言われる彼の座右の銘は「勤勉と細心」だったという。東印度会社の黄金期と共に生きてきたサールグレンは雪に閉ざされた1776年3月10日、彼の終生愛したイエテボリの町で75歳の生涯を閉じた。

5 シャルマース工科大学

シャルメルスは1748年11月13日、イエテボリ市の裕福な英国移民で卸商ウィリアム・シャルメルスと母インガ・オッレとの間に生まれる。11歳で父を亡くし、17歳で母を亡くして孤児となる。若くして同僚ラーシュ・コーレと共にイエテボリで商業に従事する。

26歳でイエテボリ市科学文学協会会員に選出される。1780年31歳の時に英・仏・蘭に留学する。1783年スウェーデン東印度会社に就職し以来10年間、広東とマカオの現地総支配人を勤める。この間に巨万の富を貯えて1793年帰国して東印度会社理事となり、1809年の東印度会社解散までその最高責任者を勤める。イエテボリでのシャルメルスは活発な産業振興活動を行なっている。帰国の年1793年にはイエテボリ市の商人ペーテル・バッゲと共にトロールヘッテ運河水門会社を設立し、1800年には“シャルマース・バッゲ水門”と呼ばれる水門を開通させている。この運河は現在では首都ストックホルムと第2都市イエテボリとを国土を横断して結ぶ全長182kmの大運河「イエータ運河」の一部となり、スウェーデンの大動脈となっている。また1795年にはスウェーデンで最初の綿糸工場をイエテボリ近郊のレールムに建設した。1809年のスウェーデン東印度会社の倒産には、彼自身も連座したが、政府は彼の非凡な経営能力に注

目し1810年には官房長官に任命した。1811年6月3日、イエテボリ市のゴールドステンにおいて62歳で永眠。終生めとらず、21の年からバチエラズクラブの会員であった彼には相続人はいなかった。その生涯を通じて、貧しい人々と乞食の子供達の面倒を見てきたシャルメルスの22万リクスドルに及ぶ遺産は、彼の遺言に従って、8,333リクスドルをマニラ鯉嘔学校に寄付した以外、その半額を友人のペール・ドゥブ医師が病院長となっていたサーलगレンスカ病院に寄贈し、残る半額を「貧しい子供達に読み書きを教える工業学校の設立」のためにイエテボリ市フリーメイスン孤児役員会に寄付された。この工業学校はペール・ドゥブ医師を理事長、カール・パームステッド教授を学長として、1829年11月5日に「シャルメルシュカ工芸学校」として開校した。3人の教官が5名の本科生（18歳以上）と5名の予科生（14-15歳）に、2年間で基礎物理・基礎化学・化学実験術・実用数学・測量学・計算尺技法・模型作成術・木工術・金工術を教授したスウェーデン最初の民間工芸学校は、現在では260名の教授と2,100名の教官、物理工学・化学工学・電気工学・計算機工学・機械工学・産業経営工学・オートメーション工学・土木工学・建築工学の9つの学部で4,500名の正規学部生と2,500名の特科生、及び700名の院生を有するシャルマース工科大学となった。スウェーデンにはルンド・イエテボリ・リンチェピン・ストックホルム・ウプサラ・ルレオの各都市に計6つの工科大学があるが、そのうちストックホルムの王立工科大学（KTH）が1827年設立で最も古い。次いで1829年設立のイエテボリのシャルマース工科大学（CTH）であるが、シャルマリストと呼ばれる彼等だけに許される「黒い房付きの学生帽

（シャルマースメッサン）」をかぶった学生達は、「貧しい子供達に工芸技術を身につけさせる」ために、王様や政府の力を借りずに全く市民の力だけで設立された自分達の母校を誇りに思っている。それは工学とは本来工芸技術を意味しており、またスウェーデンの工学士は伝統的に「シビルインフュニョール（市民技術者）」と呼ばれるように軍隊や政府のための技術者ではなく、市民のための技術者であったという歴史があるからである。

シャルメルスはイエテボリ市旧墓地に埋葬されているが、そこにはシャルマース工科大学によって建てられた「寄る辺のない子供達と病人達の無料の療育の記念碑」が立っている。

イエテボリ市にはイエテボリ大学とシャルマース工科大学の2つの大学があるが、前者の医学部は実質上サーलगレンスカ病院とほぼ等しい。そしてその設立史を見ても分かるようにサーलगレンスカ病院とシャルマース工科大学は双子の兄弟ともいえる。そのためか医学部とシャルマース工科大学の協力にはなんの障害もなく、共同研究も生化学・環境工学・遺伝子工学から臨床工学にいたるまで枚挙に暇がない。特に電気工学系の応用電子工学部医用電子工学科は、スウェーデン全国に3箇所しかないME研究センターのなかで最も古い歴史を誇る研究所であるが、博士課程の院生の博士論文はほとんど例外なくサーलगレンスカ病院で臨床実験を行ない、対になっている医学部の博士課程院生の論文審査と一緒に審査されることもしばしばである。ここ5年間でも、感覚フィードバック電動筋電義手、骨生長電磁界制御装置、人工知能脳波自動分析プログラム、人工知能による神経伝導解析装置、心電図自動解析、マイコン胎児心電計、新生児呼吸監視装置、骨伝導聴覚補

綴、パーキンソン振戦の計算機モデル解析、生体微小磁気測定解析、臍内留置型排尿ペースメーカー、などユニークな研究が、サーलगレンスカ病院との共同研究から生まれている。また学部にも目を向けると、十分な奨学金とシャルマース所有の学生寮のお陰で、両親の収入には無関係に誰でも勉強することができ、最近増加したイランやアフガニスタンからの難民達が新しい土地で生活して行くための職を身につけるために工学を学んでいる。

これはまさに創立者シャルメルスが望んだ「工学と医療を通じて、貧しい人々を助け、かつ社会に奉仕する」という理想が実を結んだ姿といえよう。

6 寄贈者の町

ストックホルムは「王立」を冠する施設が多くそのため「王の町：King's city」と呼ばれたのに対して、イエテボリはここに述べたサーलगレンスカ病院やシャルマース工科大学など寄贈者の名前を冠した施設が多く「寄贈者の町：Donator's city」と呼ばれる。そのうちリョスカ美術館、ビットフェルト高等学校などの少数を除いて大多数は、病院や老人医療施設である。北欧心臓外科センターのあるカラランダシュカ病院、呼吸器専門病院のレンストレムスカ病院、老人医療施設のエクマンスカ病院など市内の到る処に市民の寄贈による医療施設がみられ

る。いずれも市民がまず、イニシアティブを取り、市がそれを受けて整備運営を引き継いだのである。市民の医療福祉に関する積極的な考え方、市行政当局に対する信頼と率直な批判精神、そして一般的な病人と貧者に対する博愛と義務感、それらが一体となってスウェーデンの医療福祉の源泉を形作っているといえよう。制度や財源は基本的に重要である。しかし最も大切なのは、一般市民の自らの医療福祉に関する態度だと、イエテボリ市の医療福祉小史は教えている。

文献目録

- ① Ostindiska Kompaniet, Arbetet Fredag 16 oktober, p14, 1987.
- ② Svenska män och kvinnor, om Nicolaus Sahlgren och William Chalmers, 1942.
- ③ Svenskt Biografiskt Lexikon, p 342-347, 1922.
- ④ Teknik 150 år, Chalmers Tekniska Högskola, 1979.
- ⑤ Gullers Nyström, Gothenburg, Cullers International AB, 1980.
- ⑥ 福本一朗, 「社会福祉以前のスウェーデン」, スウェーデン社会研究月報 Vol. 19, No. 11, p. 2-4 1987.
- ⑦ 福本一朗, 「日だまりの中の老人たち」, モダンメディスン 87-7, p. 98-100, 1987.
- ⑧ 福本一朗, 「移民問題に見る“福祉帝国”の底辺」ぼんぶう, 1988年5月号, p. 72-76
- ⑨ 福本一朗, 「各国の医療・福祉の動向・スウェーデン」, WIBA '90, p. 562-563, 1990.

(ふくもと・いちろう)

シャルマース工科大学客員研究員)